

末日聖徒イエス・キリスト教会

# 聖徒の道

1985  
5





「およそこれらの言葉（知恵の言葉）を憶えて守り且つ行い、この誠命に従って歩むすべての聖徒らは、そのへそに健康を受けその骨に髓を受けん。また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。而して走れども疲れず、歩けども気を失うことなからん。」  
（教義と聖約89：18-20）

# 聖徒の道

1985年5月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。

大管長会：スペンサー・W・キンボール，マリオン・G・ロムニー，ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒定員会：エズラ・タフト・ベンソン，ハワード・W・ハンター，トーマス・S・モンソン，ボイド・K・バッカー，マービン・J・アシュトン，L・トム・ペリー，デビッド・B・ヘイト，ジェームズ・E・ファウスト，ニール・A・マックスウェル，ラッセル・M・ネルソン，ダリン・H・オークス

顧問：カーロス・E・エイシー，レックス・D・ピネガー，ジョージ・P・リー，ジェームズ・M・パラモア

編集長：カーロス・E・エイシー

教会機関誌ディレクター：ウェイン・B・リン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：ロイス・リチャードソン

レイアウト/デザイン：メアリー・A・ホドソン，C・キンボール・ボット

聖徒の道 1985年5月号第29巻第4号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

International Magazines PBMA0573JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright ©1985 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急に資材管理部配送センターにご連絡ください。●「聖徒の道」についてのお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター/☎0427-96-2820



「すると大ぜいの群衆が、足なえ、不具者、盲人、おし、そのほか多くの人々を連れてきて、イエスの足もとに置いたので、彼らをおいやしになった。」(マタイ15:30)

# 「自身の家を整うべし」

第一副管長  
マリオン・G・ロムニー

ロムニー副管長によるこの説教は以前になされたものですが、個人や家族の学習のため再び掲載します。

「子」をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない。」(箴言22:6) この勧告は、今の世の中を悩ましている物質主義や宗教の冒瀆、道徳の退廃、成人および青少年の非行、増加する犯罪、神の律法や人間の尊厳を軽視する風潮に対する最良の特効薬が子供の訓育であることを確信させてくれます。

現代の醜い面を強調して皆さんを脅かすのは決して私の目的ではありません。私が皆さんの注意を喚起する目的は、それらの悪影響を家庭で、あるいは私たち自身の生活で食い止めなければ、両親や子供たち、それに霊的に矛盾するこの世の思想や人々の生活態度、現代の慣習に屈してしまうすべての人々の人生に、大きな嘆きや悲しみを及ぼすことになるからです。

教会は両親が子供を訓練する助けをすることができますし、やろうとしています。しかしできるのは助けることだけです。教会は両親の最も大切な責任を代わって行なうことはしませんし、できません。主によれば、その責任とは「その子供8才の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめることです。(教義と聖約68:25)

予言者ジョセフ・スミスにこの指示をお授けになってから1年半後、主はひとつのことをつけ加えられました。すべての子供は幼児の有り様では神の前に罪はないが、その後「かの悪魔来りて(人に不従順を説き)……光明と真理を取り去りぬ。

されど、われは汝らの小児たちを光明と真理の中に導き来れと汝らに命じたり」とあります。(教義と聖約93:39-40)

それから主は指導者の兄弟たちと語られ、まずフレデリック・G・ウィリヤムスに告げておられます。「汝はいまだにわが誠命に従って汝の子供たちに光明と真理を教え居らず、さればかの悪魔はいまだに汝を支配し居れり、これ汝の苦しみを受くる所以なり。」

私たちの抱えている苦悩や少年非行の問題などは、子供たちが光明と真理を教えられていないことに起因しているのではないのでしょうか。

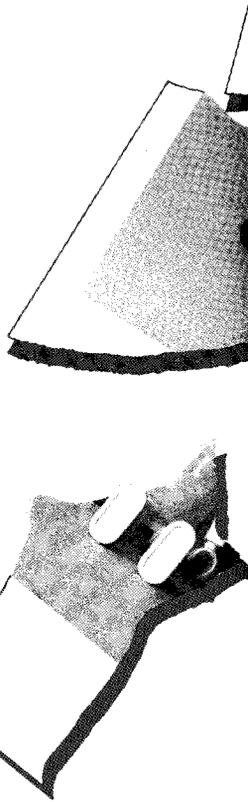
主はこの件に関してウィリヤムス兄弟に断固とした調子でこう続けておられます。「われ今汝に一つの誠命を与う。すなわち、汝もし救われんと欲せば自身の家を整うべし。」(教義と聖約93:43)

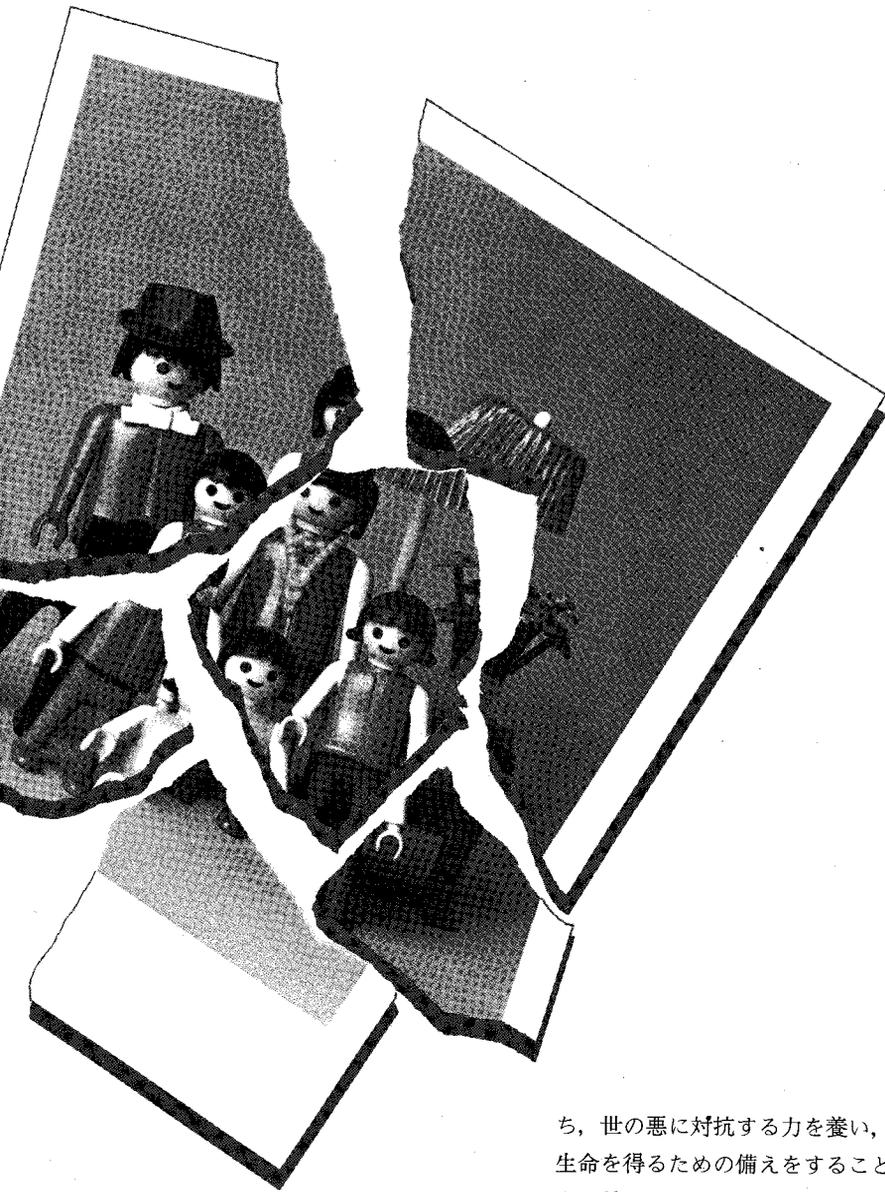
それから主はシドニー・リグドンに、「その子供たちに就きいまだにわが誠命を守」っていないと告げ、守るように戒

められました。主はさらにニューエル・K・ホイットニーに対し、子供の不品行のゆえに「その家族を整うべきものなり。その家族の者共をして、家に在りて必ず今一層勤勉に事にかかわらしめ」るようにと叱責されました。(教義と聖約93:50)

予言者ジョセフ・スミスも子供を正しく訓練していないことを叱責されました。「汝の家族共は必ず悔い改めて、或る事を捨て……ざるべからず。」(教義と聖約93:48)

このように初期の兄弟たちは、子供を





導くように、またみたまを受けて生活することを妨げるものは捨てるように命じられました。今日の両親も同じ義務を負っています。福音の原則のもとに子供を教育しないことによってもたらされる結果の重大さは、当時も今も変わりはありません。また、啓示の中で主が語りかけておられるのは父親に対してですが、その義務は母親にも同等の重さで課せられています。

この大きな責任を遂行するにあたって、食ふことや着る物、家事、さらには子供のこの世的な要求を追い求めることに心を奪われるあまり、大切な事柄をおろそかにしてはなりません。それはすなわ

ち、世の悪に対抗する力を養い、永遠の生命を得るための備えをすることです。よく言われることですが、山に登ることに熱中するあまり、疲れ果てて頂上から美しい景色を眺めることを忘れることがないようにしなければなりません。世のものに執着しすぎて、福音の観点から物を見る目を失っている人がいるのが残念です。

特に子供を教えるようにと戒められた主のみ言葉をすべての人が実行するならば、現代の若者の犯罪はどんなに少なくなるでしょう。これは、末日聖徒にとって真剣に取り組むべき問題であるはずで

たとえば従順です。主はジョセフ・スミスに言われました。「汝の家族共は必ず……汝の言うことに一層誠実に心を留めざるべからず、然らずんば彼らの居る所

「子供を教えるようにと戒められた主のみ言葉をすべての人が実行するならば、現代の若者の犯罪はどんなに少なくなるでしょう。これは末日聖徒にとって真剣に取り組むべき問題であるはずで

より立ちのかされざるべからず。」(教義と聖約93:48)では法律を守らないことに関して予言者は何とっておられるでしょうか。「われらは……法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」(信仰箇条第12条)

このように、国の法律に心から進んで従うという基本的な原則を正しく教育することが、多くの破壊行為や犯罪を一掃するうえで効果的な働きをするはずで

子供を教えるということについて主が示されたもうひとつの原則は、労働です。現代の若者に関連する問題の多くは、この原則を顧みないことからきています。

「怠惰な頭脳は悪魔の工場である」という言葉があります。聖典でも怠惰を最も卑しむべきものとしているように、この言葉は疑いもなく真理です。ニーファイは、示現で見た彼の子孫の民について次のように描写しています。「これらの子どもは、とうとう無信仰に陥ってから……汚らわしくなり、まったく怠惰であらゆる汚らわしい行いをする汚ない民になってしまうのが見えた。」(I ニーファイ12:23)

現代の神権時代に、主は怠惰を少年非行や罪悪、特にむさぼりに関連させて厳しく戒めておられます。「およそ怠る者は主の前に憶えらるべければなり。今やわれ主は、シオンに住める民を悦ばず。それは、怠る者その中にあり、彼らの子らもまた今や次第に悪事に増長し、永遠の富を熱心に求めずしてその眼は貪欲を以て充たさるべければなり。」(教義と聖約68:30-31)

「現代の神権時代に  
主は怠惰を少年非行や罪惡、  
特にむさぼりに関連させて  
厳しく戒めておられます。」

では、主がとりわけ子供に教えるようにと戒められたもうひとつの習慣、すなわち祈りについて述べたいと思います。

主はシオンに住む民に向かってこう言われました。「また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」(教義と聖約68：28)

予言者ジョセフ・スミスに主は告げられました。「勝利者たらんことを常に祈るべし。誠にサタンに打ち勝つ様に祈れ、また現にサタンの仕事に力を与えるサタンの僕らの手より免れんことを祈るべし。」(教義と聖約10：5)

末の日の文明が神とその義を日常生活や世の出来事から排除しようとしている今日、日々ほかにあるいは家族で祈ることが特に求められています。

賢明な末日聖徒の両親は、祈りの力と世間の不信仰な風潮をよく理解しているので、子供に祈ることを教えないわけがありません。朝に晩に決まって天父の前にひざまずいて心から謙遜に祈る人以上に、悪に対抗できる強力な武器を持っている人はいません。

それに加えて、両親は子供のために捧げる毎日の祈りの力を過少評価しないでください。わがままな息子と仲間を悔い改めに導いたのは、彼らのために捧げたアルマの祈りでした。

私たちが子供に教えるよう主から期待されている真理は、ほかにもたくさんあります。それらは聖典や末日の予言者の勧告から捜すことができます。

しかし何を教えるべきかを知ったら、次は福音の真理をどのように家族に教えるかも大切になってきます。この、どのように教えるかということは、私たち自身が研究と経験と聖霊の導きによって知るべきことで、このみたまは「信仰の祈りによりて……与えられ」ます。(教義と聖約42：14) しかしいかなる方法を用いようとも、それが、福音の実践が幸福につながることをよく理解できるものでなければ、効果的なものとは言えません。受けているしつけや訓練が独断的で、いつも行動が制限される、生活が楽しくないと子供が感じるようであれば、彼らは私たちの目の届くところでのみ言うことを聞き、ほかでは勝手気ままに振る舞うようになります。

それでは、私たちの行ないによって子供が福音から離れたりするようなことがないようにするには、どうしたらよいのでしょうか。主が予言者ジョセフ・スミスに与えられた次の勧告はすべての両親にとって確かな導きとなりましょう。

「如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、または維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。

また、親切と淨き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。

すなわち、聖霊に感動しては機に臨みて激しく人を責む。然る後、また彼の汝を敵視せざらんために責めたるその人に一層の愛を示す。

かくて、彼は汝の誠実は死のきずなよりも強きことを知るべし。」(教義と聖約121：41-44)

この忍耐と堅忍、愛によって、私たちは子供たちの同意と信頼を得ることができます。啓示によって与えられた福音の真理に自発的に従うよう、時間をかけ、心を込めて子供たちを教え導けば、少しづつでもあなたの教えに耳を傾け、「人類が現世に在るのは幸福を得んためである」(II ニーフアイ 2：25) ことを理解して味わうほどになるでしょう。予言者ジョセフ・スミスは言っています。「幸福を得ることが私たちの存在する目的であり、目標である。もし幸福につながる道を歩むなら、そこに到達できることだろう。」子供たちはみずからの経験と私たちの導きにより、予言者の次の言葉の意味を知って信じるようになります。「その道は

末の日の文明が神とその義を  
日常生活や世の出来事から  
排除しようとしている今日、  
日々ひそかにあるいは家族で  
祈ることが特に求められています。



徳、高潔、忠実、清さ、そして神のあらゆる戒めを守ることである。」(「教会歴史」5：134-35)

アルマが息子コリアントンに語ったように、私たちも子供たちに「罪悪は決して幸福を生じたことはない」と教えましょう。(アルマ41：10)悔い改めを引き延ばすと最終的には滅びがやって来ることを教えましょう。「あなたたちが自分の救いを受ける日はぐずぐずしている間に永久になくなってしまい、あなたたちの<sup>つ</sup>亡びは決まってしまう。」レマン人サムエルは不従順なニーファイ人に続けて言い

ました。「それは、あなたたちがその時までいたずらに生涯を送って手に入れることのできない幸福を求め、罪悪をしながら幸福を求めたが、このような行いは私たちの偉大なる永遠の頭の性格である義にそむくからである。」(ヒラマン13：38)

私たちは、子供たちが成長するとともにこれらの偉大な真理を理解できるよう、聖霊の導きを通して助けなければなりません。正しい行ないをほめながら、不正が悲しみをもたらすことを理解させるのです。

どのような社会も、両親が教訓と模範によって子供を教え、イエス・キリストの福音の原則に従って生きる決意を進んでするように靈感を与えるときに整えられていくものです。人は福音の原則が神

聖なものであるという証を得、その約束の喜びを少しでも知ると、熱心に祈り、勤勉に働き、神の戒めに厳密に従うようになります。これは、当然のことながら国の法律についても同じです。

子供を教えることに関して、両親の皆さんにはモルモン経の精神を感じ取っていただきたいと思います。ベンジャミン王は偉大な最後の説教の中で、悔い改めに導かれて信仰を強めた民に対し、子供を教えることについて次のように語っています。

「私はすでに言ったけれども、今一度これをお前たちに言おう。お前たちがもしも神の栄光を知り……自分の心をこれほどまでに喜ばせる罪の赦しを受けているならば、私はお前たちが常々神の偉大なこと……を忘れずに思い起して低くへりくだり、毎日毎日主の御名によって祈り……確く信じて変わらないことを望む。

もしもお前たちの行いがこのようであるならば、お前たちはいつも喜び、神の愛に浴し、いつも罪の赦しを保……(つ)ようになる。

またお前たちは互いに傷つけ合う心がなく、安らかに暮して、あらゆる人にその当然受けるはずのものを与えたいと思うようになる。

またお前たちは、自分の子供らを飢えさせたりはだかのまま置いたりはしないであろう。またお前たちは自分の子供らが神の律法に背き互いに争ったり戦ったりして……悪魔に仕えることを許さず、

お前たちは自分の子供らに真の道を行

どのような社会も、  
両親が教訓と模範によって子供を教え、  
イエス・キリストの福音の原則に従って  
生きる決意を進んでするように  
靈感を与えるときに  
整えられていくものです。

う事と真面目でなければならぬ事と互いに愛し互いに助けねばならぬ事とを教えるであろう。」(モーサヤ4：11-15)

当時初等協会に属していた息子とこの聖句を読んだときのことを思い出します。私たちはモルモン経を、1節ずつ交替で読んでいました。この聖句を読んでいるときに息子は次の言葉にとても強く心を動かされた様子でした。「お前たちは自分の子供らが神の律法に背き互いに争ったり戦ったりして……悪魔に仕えることを許さず……。」(14節)そこで彼は自分の悪ふざけを思い出して目に涙を浮かべていました。それ以来成人するまで、けんかをしそうになるとこの聖句が心に浮かんで来て、目に涙があふれるのでした。

兄弟姉妹の皆さん、このベンジャミン王の偉大な説教の精神と心構えを子供に感じさせることができれば、子供を教えることはもっと容易になると申しあげます。福音の精神で子供を高めるようにしましょう。そうすれば子供は互いに傷つけ合おうとは思わなくなり、かえって安らかに暮らして、あらゆる人にその当然受けるはずのものを与えたいと思うようになるでしょう。ベンジャミン王が言ったように、「真の道を行う事と真面目でなければならぬ事と互いに愛し互いに助けねばならぬ事とを教え」てください。(モーサヤ4：15)

もし父親と母親が聖霊の導きに従い、主の戒めを固く守って生活し、主と予言者の勧告に従って子供をその行くべき道に従って教えるならば、末日聖徒はやが

て栄光の門に到達することでしょう。ここではニーファイ人が享受したように、「住民……の間に何の不和争論もなく一人のこらずみな互いに正しく扱い、「民はその心に神の愛を保っていたから……何ら不和がなかった。また、嫉妬、争闘、暴動、みだらな行い、虚言、人殺し、および何らみだりがわしい行いがなかった。」(IVニーファイ1：2、15-16)当時の聖徒たちの非常に祝福されていた様子を、予言者であり歴史記録者であったニーファイは次のように表現しました。「まことに神が造りたもうたすべての民の中でこの民ほど幸福な民があるはずがなかった。」(IVニーファイ1：16)

主は、現在の神権時代にも同じような社会を築くことができると保証してくださっています。そのことを忘れないようにしましょう。しかし現代の悪の力を退けるために、私たちがすべきことはたくさん残されています。末日聖徒の両親、教師、指導者は新しい気持ちでみずから家を整え、子供が人生の真の幸福をつかめるように、愛情を込めて、しかも効果的に教えられるよう努力しなければならぬのです。

### ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点を話し合うとよいでしょう。

1. 今の世の中を悩ましている問題にとって最良の特効薬は子供を教えることである。
2. 教会は両親が子供を訓練する助けを

することができるし、やろうとしている。しかし両親に取って代わることはしないし、できない。

3. 子供のこの世的な必要を追い求めることに心を奪われるあまり、世の悪に対抗する力を養い、永遠の生命の備えとなる大切な事柄をおろそかにしない。
4. 何を教えるべきかを知ったら、次は、いかに福音の真理を家族に教えるかを知ることも必要である。いかに教えるかということは、私たち自身が研究と経験と聖霊の導きによって知るべきことで、このみたまは「信仰の祈りによりて……与えら」れる。
5. 私たちの教えは、福音を实践することが幸福への道であることを子供に納得させることができなければ、効果的なものとは言えない。忍耐と堅忍と愛によって子供たちの同意と信頼を得ることができる。

### 話し合いを進めるために

1. 「自身の家を整える」ことの重要性について自分の意見を述べる。家族にも話してもらおう。
2. 家族で朗読したり話し合ったりすると良いと思われる聖句や引用文がこの記事の中にないだろうか。
3. 訪問の前に家長と打ち合わせた方がよい話し合いができるのではないだろうか。両親の責任について、定員会指導者から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

# 各地の たより



カット：山本範子(福岡ステキ部福岡ワード部)

## 大阪伝道部の宣教師 たちによる公演

### 「スペシャル・ミュージック・ショー」— 教会員と 一体となり伝道に成果

**去**年の9月の終わり、大阪のある地区で伝道していた宣教師たちは会員伝道について深く考えていましたが、どのようにしたらよいかよくわかりませんでした。

それらについて思い悩んでいたある日、その地区にアメリカから音楽のすばらしい才能を持った長老が着任し、またすでに伝道中の宣教師たちも音楽の才能があったことから、タレントショーを計画しました。

昨年11月、10人の宣教師と4人の会員によって行なわれたタレントショーには160名ほどの人が来ていただきました。その中のほとんどの人は教会に初めて来られた人や求道者、または会員の友達でした。

教会の近くの施設からも、目の不自由な小学生3人と付き添いの保母さんたちが来ていただきました。彼らを招待する際、子供たちはショーを目で見ることができないので楽しんでいただけるか不安でした。そ

れでもショーの中で永遠の家族というスライドを上映していたとき、子供たちはスライドを見ることはできませんでしたが、宣教師の語るナレーションや歌を聞いて感動し涙を流したそうです。(保母さんのアンケートより)

「もしこのショーが効果的で良いプログラムであれば、ほかの地域でもやっていきたい」という伝道部長さんのお言葉もあり、今年から新たに愛の絆をテーマに新キャスト5名とスタッフ5名を加え、総勢20名の宣教師による「スペシャル・ミュージック・ショー」の公演を開始しました。2月2日の東大阪ワード部を皮切りに、2月23日の阿倍野ワード部、3月2日の枚方ワード部、3月9日の奈良ワード部と続き、それぞれの公演には平均130名前後の人が来ていただきました。

コンサートを行なうにあたってはいろいろな障害がありました。準備段階で数々の問題が生じ危惧しましたが、ショーの寸前にはそれらの問題もすべて解決しました。たとえば、ショーの1時間前にコンサートにどうしても必要なコードが無いことに気がつき当惑していたときに、ある管理人さんから「何か必要な物はありますか」と電話があり、その兄弟の助けがあつて無事に始めることができました。

また、宣教師の中で病気になった人も少なくありませんでした。東大阪ワード部のコンサートのとき、キャストの内3人が風邪をひいて声が出せませんでした。本番のときには声が出るようになり、歌い切ることができました。さらにまた、宣教師の転任によってキャストが方々に移ったため、遠い所から練習に来るのが大変になったり、時間や交通費の問題が生じましたが、各自の努力によってそのような試練も乗り越え

ていきました。

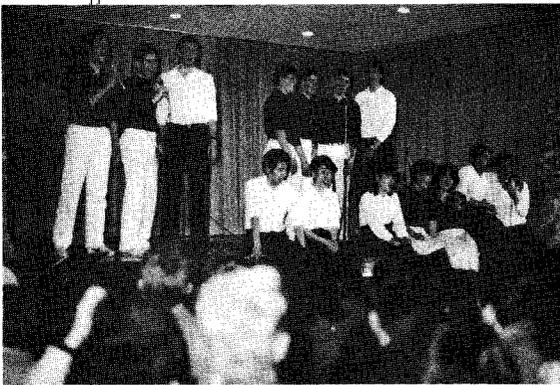
このコンサートを通して、今まで人生について考えたことがなかった方に、自分の人生について、あるいは家族の大切さや愛という言葉の意味を考え直す良い機会を提供することができました。今まであまり熱心に福音を聞かなかった求道者はその意味を理解し、まじめに福音を聞くようになったり、お休み会員になりかけていた方は立ち直るきっかけを得たりもしました。また、このコンサートを見て感動し求道者となった方が3月17日(日)にバプテスマを受けられたり、伝道に出ようか大学院に進学しようかと悩んでいた兄弟がこのショーで一生懸命に演じる宣教師を見て感動し、伝道に行く決心をされたりしました。このようにこのコンサートに来た人が何らかの影響を受け、温かい気持ちを感じてくださったのはとてもうれしいことでした。

これも週3回、朝の大切な勉強時間を使つての必死の練習と華やかな舞台の裏で働いている同僚の宣教師と会員たち、このプログラムを許可し温かく見守ってくださったブロック伝道部長ご夫妻、そして何よりも神様の助けと導きがあったからだと思えます。

コンサートを行なううえで、私たち宣教師自身にも葛藤がありました。それは、このプログラムがはたして本当に伝道になるのかという気持ちと、その一方で主から与えられたそれぞれの才能を使って、このような伝道もできるのだということを、教会員にも知ってもらいたいという気持ちがいっつもありました。ときには、練習している間に街頭伝道や戸別訪問をした方が良いのではと感じたことも何度かありましたが、ショーの目的を忘れず、互いに励まし合いながら、主によく祈り求め真剣に取り



大阪伝道部の宣教師たちによる「スペシャル・ミュージック・ショー」の公演



愛の絆をテーマに2月2日の東大阪ワード部を皮切りにコンサートを行なう宣教師たち

組みました。それによって宣教師と教会員が一致し、大きな成果を得ることができたと感じています。ワード部の会員の方々にはちらしを配り、お友達を何人も連れて来ていただきました。会員伝道を推進するうえで大きな助けとなったことを心から感謝

しています。

最後に私たちがこのコンサートでもうひとつ重要視したことがあります。それはプログラムを通して、まだ福音を知らない人に福音を伝えていく方法です。コンサートを重ねるうえで、いろいろなアイデアを駆使して効果的に福音を伝えるためのコンタクトの方法を考えていきました。しかしすぐにコンタクトして、改宗に結びつけようとするとむずかしい面がありましたが、教会や福音のイメージを高めるうえでのかげ橋としてコンサートが大いに役立ちました。

これからもすべてのプログラムにおいてプログラムだけで終わってしまうのではなく、終了後も引き続いて福音を伝えられる方法を考えていきたいと思えます。このコンサートは宣教師と会員が一致しなければ成功しません。これからも一人一人の才能を生かして主のみ業を果たしていきたいと思えます。(レポーター：大阪伝道部専任宣教師・木全輝一長老)

### サタデーズ・ウォリア (土曜日の戦士)とは?

私たちは、この劇団に生まれ育ちながら、先代宣教師と出会い、育ちました。その時に、この劇団で活動する機会を得たことは、私にとって大きな恵みでありました。それは、この劇団の活動を通して、多くの人々に福音を伝えることができました。ついで、本格的な活動を開始した。この劇団は、土曜日の戦士として、多くの人々に福音を伝えることができました。ついで、本格的な活動を開始した。この劇団は、土曜日の戦士として、多くの人々に福音を伝えることができました。

この劇団は、生まれ育ちながら、先代宣教師と出会い、育ちました。その時に、この劇団で活動する機会を得たことは、私にとって大きな恵みでありました。それは、この劇団の活動を通して、多くの人々に福音を伝えることができました。

3/21 水曜日 第1回公演(昼の部) 1:30-4:00  
 香りの日 第2回公演(夜の部) 4:30-7:00  
 こと 末日聖徒イエス・キリスト教会  
 岡町ワード部



案内用のチラシ

遅くまでの練習にも笑顔で集いました。歌の練習と並行しての本読み、立ち上げこ、ダンスなども時間を忘れるほどでした。衣装を作るために手芸の本をひっくり返す女性の団員たちの楽しそうな声、夜の練習で覚えた歌やセリフが仕事中に思わず口から出てくるという日々の9カ月にわたる準備期間を経て、3月21日の公演を迎えました。

当日は遠く福井、和歌山、北九州や奈良から来られた方もいました。昼夜2回にわたる公演とも会場の岡町ワード部のホールは満員となり、延べ300人を越える入場者がありました。

公演後のアンケートから、多くの方々に喜んでいただける内容であったことを知ってとてもうれしく思いました。

「すごく感激しました。ミュージカルを『なま』で見たのは生まれて初めてです。こんなすばらしいものとは思いませんでした。」(一求道者)

「大変感動しました。子供たち(中学生)を連れてきて本当によかったです。子供たちに知ってほしいことを熱意を持って、いい演技で教えてくださいましてありがとう。」(ある教会員の母親)

本来の文化活動は「楽しい」ものです。その「楽しさ」の中にも生きる喜びを見つけていくことができるのではないのでしょうか。

「人類が現世にあるのは幸福を得るためである」の言葉通り、私たちは安息日に教義を学ぶことによって喜び、教会の文化活動を進めることによって福音を楽しむことができました。そしてより多くの人と共に、このミュージカルを通して神様の計画を知ることができました。このミュージカル「サタデーズ・ウォリア」の歌の中に「そうよ、それが私たちよ／この終わりの日の／神の子供たち」という一節があります。本当に私たちは神の子供たちです。(レポーター：「オカマチ・サタデーズ・プレイハウス」主宰・平尾二三夫〔大阪北ステキ部岡町ワード部〕)

そうよ、それが私たちよ  
 この終わりの日の  
 神の子供たち

## ミュージカル「サタデーズ・ウォリア」の公演から

(大阪北ステキ部)

教会の中で質の高い、楽しい文化活動をしたいと考え、大阪北ステキ部岡町ワード部の川村泰博兄弟とふたりで、昨年の春に劇団「オカマチ・サタデーズ・プレイハウス」を結成しました。そしてアメリカの教会員原作によるミュージカル「サタデーズ・ウォリア」(土曜日の戦士)を公演しようと計画したのです。「サタデーズ・ウォリア」はアメリカの有名なミュージカルで末日聖徒の教義を基としており、前世、誕生、伝道、結婚、死などをテーマとした多面的な現代劇

昨年7月、劇団員を募集したところ、教会員でない方3人を含めて20余名の団員が集まりました。歌の練習、キャストイングのためのオーディションなど、本当に楽しく練習が続けられました。既婚者3人を含む団員のほとんどは社会人でしたが、夜



劇団「オカマチ・サタデーズ・プレイハウス」の公演

# 新しくなった地域会長会,日本に駐在

4月の総大会で地域会長会の異動が発表になり、日本が所属するアジア地域会長会は本年7月1日付をもって、会長にウィリアム・R・ブラッドフォード長老、第一副会長にジェイコブ・ディエガー長老、第二副会長にキース・W・ウィルコックス長老が就任することとなった。新会長会は夫人と共に東京に駐在することになる。

駐在制度に関してヒンクレイ長老は、過去8カ月にわたってヨーロッパ、南米、太平洋諸島で試験的に採用した結果、大きな成果が得られたので、アジア地域を含む他の3つの国際地域でも採用すると述べている。(「聖徒の道」本年7月号参照)

本号においては、新会長会の略歴を、ウィリアム・R・ブラッドフォード地域会長のメッセージを含めて紹介する。



第一副会長  
ジェイコブ・ディエガー

1923年、オランダのハーグでアレクサンダー・フィリップスとマリア・ジャコバ・コルネリア・シール・ディエガーの間に生まれる。恵まれない環境から国際的に有名なフィリップス社の副社長にまでなった、オランダでは立志伝中の人。現在5カ国語を話す。

教会へは、インドネシア人であるベア・リム・ディエガー夫人と共に1960年に改宗した。そして1976年4月3日に七十人第一定員会会員として支持された。その気さくな人柄は教会幹部の間でも「陽気なオランダ人」として有名である。



地域会長  
ウィリアム・R・ブラッドフォード

1933年ユタ州スプリングビル生まれ。ブリガム・ヤング大学卒業。軍人グループリーダー、地方部長、支部長、チリ・サンチャゴ伝道部長を歴任し、1975年に教会幹部に召された。伝道部長に召される以前は、テキサス州マカレンにあるインターナショナルフルーツグローアーズ・アンド・シッパーズ社の社長であった。日本・韓国地域担当代表管理役員の責任を受けるまでは、同じ代表管理役員としてメキシコ北部を担当していた。1954年に専任宣教師として日本で伝道した経験がある。メアリー・アン・バード夫人との間に6人の子供がいる。



第二副会長  
キース・W・ウィルコックス

1912年ユタ州ハイラム生まれ。工学学士号をユタ大学から、修士号をオグデン大学からそれぞれ取得している。これまで監督、ステーク部長、インディアナ州インディアナポリス伝道部長、オグデン神殿長を歴任。またユタ州の下院議員を2年間務めた。建築家であるウィルコックス長老は、ワシントン神殿の設計者としても広く知られている。ほかにもユタ州プロボの宣教師訓練センター、オグデン連邦庁舎などの設計を担当している。ビバ・メイ・ガルマ・ウィルコックス夫人との間には6人の娘と14人の孫がいる。

# 救いの計画

アジア地域会長

ウィリアム・R・ブラッドフォード

**私**がこれからお伝えするメッセージは、真実のメッセージです。私の言葉に憶測はありません。この私のメッセージは、天地で知り得るメッセージの中で最も偉大なものです。これを守り伝えるために、何百万人という人々が犠牲になりました。

このメッセージが口頭であるいは文章で伝わるのを阻止するために、恐ろしいほどの力が注がれてきました。あらゆる方法が使われています。それはみな伝える人々の口を閉じ、聞く人の耳をふさぎ、読む人の目を見えなくするものでした。

私は神の使いとして権能をもって話します。このメッセージは神のもので、このメッセージとは、神が天におられるということです。地球に住んでいる皆さん、喜んでください。神は生きておられます。私たちが生きていることが確かであるように、神が生きておられることも確かなことなのです。神は本当におられます。神は人と同じ姿形をしておられます。神には骨肉の体があり、それは触ってわかるものです。神は生きておられますし、感情や情熱を持っていらっしやいます。また限りがなく、永遠です。神はいつまでも変わることがなく、とこしえよりとこしえに至ります。

私はこの神が自分の天の御父であることを知り、うれしく思います。そして、そのことをはっきりと宣言するものです。私は神の息子です。私は神のみ姿にかたどって造られました。また、私は神の子孫を通して生まれてきました。私は神の種に属するものです。これほど喜びを与えてくれる教えがほかにあるでしょうか。人間が理解し得る中で、これほどに荘厳な真理がほかにあるでしょうか。

私は神の息子であり、神は私の御父です。

私と神の関係は父と子、親と子、親と子の関係です。神は私を愛してくださいます。その愛はまことに深いものです。私は神を知るにつれ、神への愛をさらに深めています。

神はある所に住んでおられます。それは天国と呼ばれています。神は私の天国における御父です。天国を造られたのは神ご自身です。神は律法によって、英知と光と真理を組織し、天の家をお造りになりました。神の子供たちは、天国を組織した律法の条件にかなうなら、そこで神と共に住むことができます。

神は闇、死、悲しみ、混乱と無秩序、無慈悲に対して、光と生命、喜び、調和と秩序の世界に天国を組織されました。そこでは、あらゆる善と厳正さ、真理と徳が一体となっています。

神は天国の境を定め、それをご自身の王国として確立されました。律法の定めるところにより、その制限と条件を設けられたのです。そしてそこを日の光栄の王国と呼ばれました。そこは私たちの天父なる神が住んでおられるところです。

そのことを知るなら、私が天に向かって、「天にいますわれらの父よ、み名があがめられますように」と声をあげたり、歓喜のうちに「永遠の父なる神よ」と言っても、少しも不思議ではありません。

「神はまた人を男と女とに創り、これらを己が姿に象りて己が像さながらに創りたまえり。」(教義と聖約20:18)

もし皆さんに見る目があり、理解する心があり、感情や情熱があり、触ってみる手や、聞く耳があるならば、あるいはこれらの感覚の一部でも持っているならば、神の本当の姿が理解できるはずですよ。

私たちは神の子供です。神はご自身の姿

にかたどって、男と女とお造りになりました。人を創造されたのは神なのです。

もう一度申しあげます。神と私たちの関係は父と子、親と子の関係です。神は私たちを愛しておられます。神は私たちのために天の家を造ってくださいました。そして私たちが日の光栄の家で生活することを望んでおられます。神は私たちが神と同じように栄光に満ちた生活をするように望んでおられるのです。神のようになり、神のような生活をするには、神ご自身も従っておられる律法の条件に従順でなければなりません。

神はそのことをご存じで、神の子供たちが訓練と経験を積めるようにしてくださいました。それらの訓練や経験を通して、私たちが完全な者となり、神の律法に定められた条件に従えるようになるためでした。

そのためには、私たちは神のみもとを離れる必要がありました。神の律法に完全に一致した従順な者となるまで、その訓練を積める所に行く必要がありました。そこで神の律法に従って生きるのです。

神は地球とその中のあらゆるものを創造されました。私たちは、地球とその環境とをよく知っています。私たちはそれに触れ、臭いをかぎ、見たり、感じたりすることができます。地球の秩序、季節、その恵み、厳しさをも知っています。神は私たちのためにそれらを計画され、お造りになりました。

神はご自身の子供たちに、ひとつの約束が伴う戒めを与えられました。もしその戒めに従うなら、地上での経験は私たちを完全な者とし、神の律法への全き従順に導き、やがては神と共に住み、神と同じ生活をすることにふさわしく備えてくださるのです。

神が子供たちに与えられた戒めは、非常に簡単なものでした。それは、「唯一の生ける真の神なる彼を愛してこれに仕えよ。而も、彼らの礼拝すべき者はこの唯一の神なり」(教義と聖約20:19)ということに尽きます。

しかし強制は許されなかったことでした。神の子供は皆自由意志を持ち、自分で物事を選ぶ権利が与えられるように定められました。戒めに従い良い結果を選ぶこともできれば、それと反対のこともできました。神は、もし戒めに従わないならば、みもとに戻ることにはできないと子供たちに教えるとともに、この地上にいる間、決してひとりしておくことはないと言われました。神はご自分の教えや言葉を、み使いや聖霊、また祈りという手段を通して送り、子供たちの進歩のために、予言者を通してみこころを示すと言われたのです。神は子供たちのために手本となるものを与え、それらをすべて利用することができると言われました。しかしそれでもなお、子供たちは自分で選択し、自分の選びに従って行動しなければならぬと教えられ、神の律法への不従順がもたらす結果についても教えられました。

神の子供に救いと昇栄をもたらすための計画に、これらすべてが組み入れられました。そして私たちは、その計画を注意深く、正確に教えられました。この計画の行き着く先についても十分な考慮がなされ、それに対する備えもなされました。そして、この計画の管理者が選ばれたのです。

そのときの様子を述べた神ご自身のみ言葉があります。

ルシフェルというご自身の息子のひとりについて、神は次のように言っておられます。「彼わが前に来りて言いけるは、見たまえ、われ此所に在り。われを遣わしたまえ。われ汝の子と成らん。われことごとく人類を贖いて一人だに失うことなからしめん。われ正にかくの如くすべし。これを以てわれに汝の誓を与えよと。

これを以てそのサタンわれに叛きて、われ主なる神のすでに人に与えたる人の自由意志を滅ぼさんとなし、しかもまたわが持てる権能を自らに与うべきことを求めたる

により、われわが生みたる独子の権能によりて彼を投げ落さしめたり。

而して彼はサタンと成れり、実にあらゆる偽りの父なる悪魔となりて人を欺きだまし、以てわが声に聴き従わぬすべての者を欲するままに虜となすなり。」(モーセ4:1, 3-4)

神はこの地上にご自身の子供たちを置き、霊の体を宿すための肉の体を与えられました。しかし彼らはサタンに従い、神の神聖な律法に背きました。「されど人はこの神聖なる律法を破りて肉欲と悪魔とに付き、墮落せる人となりたい。」(教義と聖約20:20)

墮落せる人とは、みずから死を招いた人のことです。死にはふたつの種類があります。ひとつは、すべての人が知っている肉体の死です。この死から逃れることができる人はいません。どのようなことをしても肉体の死を避けることはできないのです。この死がいつ来るかは、私たちにわかりません。

私たちは皆生命を愛しています。それに執着しています。私たちは苦しみや悲しみに耐えなければなりません、それがいつか、人生に喜びをもたらしてくれるものならば、ほとんどすべてのものを喜んで耐えようとしませぬ。

私たちは死を恐れますが、その理由はひとつしかありません。それは死が見ることのできない未知なるものだからです。

その肉体の死はこの世で一緒に生活していた人々との別離をもたらします。私たちの霊の体は生き続けます。しかし、墮落した人の霊体は栄光に満ちた神のみもとに帰ることはできません。

肉体の死は、家庭や愛する人々との別離をもたらしますが、神の戒めに従わずに墮落するならば、その霊体は天の家から断たれ、永遠に暗闇と悲しみの境遇の中で生活することになります。

何という苦しみ、何という悲しみでしょう。肉体を離れ、神のみもとからも離されて、苦痛の中に永遠に生きなければならぬとは、何と惨めなことでしょう。

では、墮落した人はどうしたら立ち直ることができるのでしょうか。どこから救いが得られるのでしょうか。

「これを以て全能の神はその生みたまえる一人の御子を与えたまひし……。」(教義と聖約20:21)

神は言われました。「されど見よ、わが愛しむ子、太初より選びたる者なるわが愛子、われに言いけるは、父よ、御旨の成らんことを、栄光とこしえに父にあれ、と。」(モーセ4:2)

この独り子の名は、イエス・キリストです。イエス・キリストは地球に来て、肉体から霊が分離する肉体の死と、霊が神のみ前から断たれる霊の死とを征服するため、み業を行なわれました。

「彼は誘惑を受けたまいしがこれを心に留めたまわず。

彼は十字架につけられ死して3日目にまたよみがえり……たもう。」(教義と聖約20:22-23)

人が墮落して肉欲にふけるのをごらんになり、神は次のように定められました。

「キリストの御名を信ずる一切の者のために、キリストにより創世の前から用意された贖い救う計画とを宣べ伝えた。

それからまた人類は墮落したのであるから自分で何物も受ける償いはないけれども、信仰と悔改めなどによりキリストの苦しみと死とがその罪を贖うことができるのを説き明し、またキリストが死の縄目を断ち切りたまひ、墓はもはや勝利を得ず、また栄光が得られると言う望みによって死の苦しみが消え失せることを知らせた。」(アルマ22:13-14)

キリストはこのみ業を終えられると、「天に昇りて御父の右に坐し、御父の御旨に従い、全能の力を以て世を治めたもう。

そは、信じて彼の聖き名によりてバプテスマを受け、信仰を以て終りまで忍ぶ者は何人もみな救われんためなり。

われらこの事を知る。すなわち、すべての人々は悔い改めてイエス・キリストの御名を信じ、その御名によりて御父を拝し、キリストの御名を信じて終りまで忍ばざるべからず。然らずんば、神の王国に救われることを得ず。」(教義と聖約20:24-25, 29)

これは、人が知り得る教えの中で最も偉大な教えです。

「自由は来る 主は死をください 勝利を得たり」(「讚美歌」93番)

私は、自分が理解していることを話しています。私が話したことは真実です。

「それが本当のことだとうしてわかるのですか」と言う人がいるかもしれません。

私はここにモルモン経を持っています。これはイエス・キリストについてのもうひとつの証です。これを守り伝えるために、何百万人という人が命を犠牲にしました。全能の神はこの書物を守るためにみ腕を伸ばして、剣を振りおろしてこられました。この本には私たちにとって非常に大切なことがふたつ含まれています。そのひとつは、墮落した人々についての記録です。

墮落した人々の記録を持つことがどうしてそれほど大切なのでしょう。それはこの記録を世に出すために人々が味わった試みや苦しみに見合うほどの価値を持つものなのでしょうか。全能の神ご自身が絶えず介在されるほどの価値がその記録にあるのでしょうか。

私の考えでは、人種や宗教にかかわらず、救われるために、あるいは贖われるためには何が必要かを最初に理解しなければ、救い主、贖い主の使命や必要性を理解することはだれにもできません。

宗教や伝統に関係なく、だれでも墮落した人についての教えを理解しなければ、死への勝利や、自分の救いに必要な条件について理解することはできません。

サタンはアダムとイヴが最初にこの地上に送られたときから、天父の子供たちをだまし続けてきました。

神の子供たちは長い間だまされてきました。そして、ごくわずかな人々を除いて、墮落した人についての教えを理解した人はいなかったのです。

ですから墮落した人についての記録が載せてあるこの本をよく見ていただきたいのです。

「これらによりてわれらは知る、神天に在すことを。この神は限りなく且つ永遠にして、とこしえよりとこしえに至り変ることなき同じ神にして、天と地とその中にあるすべてのものを仕組みたまいし者なり。

この神はまた人を男と女とに創り、これ

らを己が姿に象りて己が像さながらに創りたまえり。

而してこれらに、唯一の生ける真の神なる彼を愛してこれに仕えよ。而も、彼らの礼拝すべき者はこの唯一の神なり、と誠命を与えたまえり。

されど人はこの神聖なる律法を破りて肉欲と悪魔とに付き、墮落せる人となりたり。」(教義と聖約20:17-20)

墮落した人とは、神のみもとから永遠に切り離されなければならない人のことです。その人は永遠の死を味わい二度と神のみもとへ戻ることはできません。

この本の中でもうひとつ大切なものは、イエス・キリストの完全な福音です。神はご自分の子供たちのために救いと昇栄の計画を備えられました。この計画はイエス・キリストの福音と呼ばれます。神のみもとに帰り、神のような生活をするために何をしたらよいかについて詳しく説いてあります。また、キリストが実際どういうお方であられるかを教え、キリストを救い主、贖い主、またこの地球を治める全能の神として最高の地位に置いています。

「それが本当だとうしてわかるのですか」と思う人がいるかもしれません。

私たちの救い主であられるイエス・キリストは、天父のみこころのままに全能の力をもって統治されんがため、天へと昇っていかれました。しかし、決して私たちが放置されたものではありません。地上に聖霊を遣わしてくださったのです。聖霊は聖なるお三方の中の第3番目に位するお方です。聖霊は神会を構成されるお方であり、慰め主でもあられます。そして私のメッセージが真実であることを神の子供たちに証してくださいませ。

墮落した人についての教え、またイエス・キリストの完全な福音がモルモン経に収められていること、私のもとを訪れ、これらの真実性を心にしみわたるように教えてくださる聖霊、こうしたことによって、私はこれまで述べてきたことが真実であると理解しているのです。

神が天におられること、神が私たちの天の御父であられること、また私たちが神の子供であること、天においても地において

も、これ以上にすばらしいメッセージはほかにありません。世界中の人々にこのメッセージを知っていただきたいと思います。

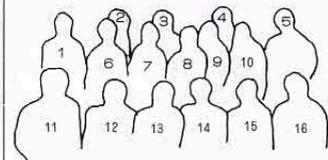
このすばらしい真理を知っている人々には、これを世界中に宣言する特権と責任があります。私たちの働きが成功するかどうかは、神の子供たちにこの知識と理解を伝える能力がどれほどのものかにかかっています。

再度申しあげます。私たちは救い主が必要であることを理解しなければなりません。そのためには第一に、私たちが何から救われなければならないのかを知らなければなりません。また、何から救われなければならないのかを理解するためには、墮落した人についての教えがわからなければなりません。そして、墮落した人についての教えを理解するためには、神が私たちの天父であること、神が戒めを与えてくださったにもかかわらず、人々は戒めに背き、肉欲にふけて墮落したということを理解する必要があります。

このモルモン経は私たちの宗教の鍵です。この本に書かれている教えを学び、それに従って生活しなければ、昇栄して天の王国に入ることはできません。この本には約束もともに与えられています。この本を読み、神に向かって声を出して祈ってみてください。「神よ、あなたは実在のお方なのですか。あなたは私の御父と呼ぶべきお方なのですか。これは本当のことですか」と。神はあなたの心に聖霊を送ってくださいませ。そして、愛し愛されることが理解できると同じように、これが真実であることもわかるようになります。

私は聖霊による証をもって、このメッセージが真実であり、この書物がまことのものであることを証します。皆さんが昇栄の賜を受けることができるようにお祈りいたします。神は実在のお方であり、天におられます。また神は私たちが愛し、私たちがみもとへ戻るのを待っておられます。イエス・キリストのみ名によって申しあげます。アーメン。(1983年6月23日、ブリガム・ヤング大学で話されたメッセージ)

3月に召された  
JMTC第70期生  
16名の名簿



(S:ステーキ部, M:伝道部, W:ワード部, B:支部)

	〈出身地〉	〈伝道地〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 阿部 誠司	東京南S/渋谷W	福岡伝道部	9. 古堅 裕美	沖縄那覇S/沖縄W
2. 水上 雅晴	札幌西S/小樽W	仙台伝道部	10. 大場 智恵子	札幌西S/藻岩W
3. 徳沢 清児	東京北S/中野W	名古屋伝道部	11. 竹下 心也	東京北M/新潟B
4. 小野 眞太郎	大阪北S/大津B	東京北伝道部	12. 北島 敬司	岡山M/宇部B
5. 西川 利幸	大阪堺S/三国ヶ丘W	福岡伝道部	13. 勝政 英人	仙台M/盛岡B
6. 江部 文子	東京北S/豊島W	神戸伝道部	14. 田淵 雅人	東京東S/千葉W
7. 葛谷 真由美	横浜S/小杉B	福岡伝道部	15. 鈴木 賢治	岡山M/山口B
8. 岩田 明美	岡山S/米子W	東京南伝道部	16. 斎藤 成	名古屋S/豊田B
				福岡伝道部

### アメリカ/カナダのキリスト教諸派

〈1984年版アメリカ/カナダのキリスト教年鑑統計〉

教 派	会員数(アメリカ)	1965年度統計からの変動パーセント
1. ローマ・カトリック教会	52,089,000	+12.6
2. 南部バプテスト教会	13,992,000	+29.9
3. ユナイテッド・メソジスト教会	9,457,000	-15.0
4. チャーチ・オブ・クライスト	3,709,000	記録なし
5. 末日聖徒イエス・キリスト教会	3,521,000	+60.1
6. 長老派教会(プレスビテリアン)	3,122,213	-20.8
7. ルーテル教会・オブ・アメリカ	2,926,000	-6.9
8. 聖公会(エписコパル)	2,794,000	-18.5
9. ナザレン教会	2,631,000	-2.3
10. アメリカン・ルーテル教会	2,347,000	-7.7

(「チャーチ・ニュース」1985年1月20日付)

注: 信者に対する定義が教派間で様ではなく、ある教派は幼児洗礼の教義のために幼児をもその会員数に含めている。

### 3人の偉大な姉妹 宣教師の模範



山口地方部  
下関支部  
元東京北伝道部  
専任宣教師伝道  
部長補佐  
谷口 正剛

**私** が伝道していた東京北伝道部では、オグデン伝道部長の篤い信仰と元弁護士としての経験と才能、宣教師一人一人への深い愛と関心、そして伝道部長ならではの主のみたまの導きによって卓越した指導を受けてきました。このような素晴らしい指導者のもとで伝道できたことは、私の人生にとって非常にプラスとなりました。それはお金や地位、名誉には代えることのできない私の宝物です。

さて、伝道部長の与えてくださった教訓

もさることながら、私のみならず、ほかの多くの長老たちにとっても感動的な模範と影響力を与えてくれた姉妹宣教師がいました。それは岩本、秋山、長谷川の3姉妹です。

「現世は、人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は、人間が各々働きを遂行せねばならぬ時期である。」(アルマ34:32) この聖句の忠告通りに実行しているこの3人の姉妹たちの模範は、伝道部全体に非常に力強い影響を与えました。

彼女たちの献身ぶりと勤勉さ、強固な信仰と愛の深さは、同期の長老たちはだれひとりおよびもつかぬほどでした。実際に彼女たちは毎月コンスタントにバプテスマを見ましたし、教える技術はほかのどの宣教師よりもはるかに優れていました。

あるとき、伝道部の約半年分の改宗者の統計を調べたところ、なんと全体の約40パーセントがこの3人の姉妹たちの手によってバプテスマを施されていたのです。

オグデン伝道部長は、その特異な結果に注目し、なぜ彼女たちがそんなに成功するのか調べることにしました。これが、この3人の姉妹宣教師がクローズアップされる発端となったのです。

まず伝道部長はゾーン・リーダー(巡回宣教師)の真鍋長老に、その3人と面接し成功の秘訣を探るよう依頼しました。真鍋長老は持ち前の才能を十分に生かして、実に明確に彼女たちの成功の秘訣を探り当てました。それはみたまの導きを受けること、愛と関心を示すこと、勤勉に働くことに尽きました。

ゾーン・リーダー大会でそれが発表されたとき、私は3人の姉妹たちの模範にならって自己改善を図る決意をしました。

ところが人間は弱いもので、百聞は一見に如かずということわざのごとく、話に聞いただけではなかなか彼女たちのレベルまでその秘訣を習得できませんでした。

そこで伝道部長はゾーン・リーダーだけでは物足りず、ディストリクト・リーダー(監督長老)も集めて実際に彼女たちから直接訓練を受ける会を催しました。伝道部全体の伝道リーダーたちの前で彼女たちは堂々と、しかも実に効果的に教えました。そして彼女たちは言うだけでなく、実際に行動し、その成果をあげていました。それをまったく誇ることもなく、実に謙遜に主のみ業のために一途に取り組んでいた姿

は、私たちの最高の模範でした。

あるとき、伝道部長は皮肉混じりに「新しい方針を作ろう。今まで見たこともないが、姉妹たちをゾーン・リーダーにしよう」と言いながら苦笑いをしました。しかしそのあとで、真剣な面持ちでこう言いました。

「実際にあの3人は長老たちより早く走るよ。」

私は、正直に言うと、その3人の姉妹たちに劣等感を感じずにはられませんでしたが。しかしそれもほんのつかの間で、自分の一切の高慢を捨て去り、彼女たちを目標にし、どこが自分と違うのか研究し始めました。

私はあるひとつの大切な原則に気づきました。彼女たちと私との違いは次の一点にすぎなかったのです。それは、実行ということです。実行とは、単に知るだけのことではありません。また単に行なうことでもありません。神を信じる不屈の信仰、つまり神を絶対的に信じきる信頼感のもとに、人を変えさせ動かす力である真理のみたまの力が加わらなければ、真の実行をすることはできないのです。偽りや見せかけではなく、継続し、しかも純粋な愛と真の従順の精神に基づいた実行力こそ、本当の実行なのです。

また、彼女たちは神に対する信仰を証明するために、毎日の自己訓練を怠らず、清い生活を送り、完全に規則に従う生活をしていました。この忠実さこそが、真理のみたまを受ける資格を得させたのです。

彼女たちの指導が伝道部に浸透し始めてから、家庭集会やバプテスマの数が増加し始めました。私自身も、みたまの影響を受けて人を教え導くことに成功し始めました。訓練されたことを余計な考えはさまずに心を素直にして実行した結果、自然な形でバプテスマを見ることができたのです。

人は人の語る言葉によってではなく、行なう姿によって影響を受けるものです。良い模範は人を光明と真理に導き、悪い行動は人を墮落へと誘惑します。

イエス・キリストの生きた完全な模範に心から感謝します。イエス・キリストの模範が完全でなければ、私たちも完全にはなれないでしょう。

キンボール大管長の“Do it!”(実行)というモットーの意味が少しでも理解できたことを心から感謝します。他人や環境、訓練に左右されることなく、ただキリストの模範に従うことができるよう努力していき

たいと思います。(たにぐち・まさつな 1960年生まれ)

## 「これ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためなり」



岡山伝道部専任宣教師  
村上 園美 (写真右)

ど ちらかと言えば、私はあまり恵まれない家庭環境の中で育ちました。けんかの絶えない両親の間にあって私が覚えたものは、人の顔色を伺うような生活でした。平安のない家庭に育った私はいつも愛に飢えていました。

私が中学に入学して間もなく母が突然家を出てしまい、3年後、私や弟には何の説明もないまま両親は離婚しました。このような状況下において「なぜ生まれて来たしまったのだろう?」「生まれてなんか来たくなかった……」と自分自身をのろい、一日も早くこの世から消えうせてしまいたいと真剣に思いつめていたのです。

高校1年になったとき、私は学校の図書室でカトリック教会の教義についての本を見つけたことから、急速にキリスト教に興味を持ち始め、やがてそれはイエス・キリストに対する信仰へと成長していきました。ひとりてひそかに祈るようになり、聖書も読み始めました。

時を同じくして父は再婚し、新しい義母が来て家の中の雰囲気もガラリと変わり、私はつかの間の幸福感を味わったようでもありました。確かに初めは楽しい日々でしたが、段々に義母は私や弟に冷たく当たるようになり、彼女に子供が生まれるに至って決定的なものになりました。ある日私は義母の罵しりに傷つき絶望してしまい、「結

局私は幸せにはなれない人間なのだ。母さえ私を捨てなければ、少なくとも人並みの生活くらいはできたかもしれない」と、母に対して激しい憎悪を覚えるようになりました。

そのような私を支えていたのは、高校を卒業したら洗礼を受けてキリスト教信者になるというひそかな夢だけでした。本当は今すぐに……という気持ちもありましたが、父は大の宗教嫌い、もし私が教会に入ったらどのような仕打ちをされるか目に見えていました。それに私自身キリストへの愛と信仰はありましたが、それほどカトリックへの確信はありませんでした。

そんなとき、私はある機会を通してふたりの長老からレッスンを受け始めました。私は自分が神の娘であることや人生の目的を知りました。また、祈りを通してこの教会が神の真の教会であることを知りました。そこまで知ってしまった以上、バプテスマを避けて通れるはずがありません。

1979年6月29日、私は両親の反対を押し切ってバプテスマを受けました。最初は黙認の態度をとっていた父は、段々暴力を振るうようになり、信仰を捨てるように迫りました。覚悟していたとはいえ、私もこれ以上波風を立てたくないという気持ちもあり、父には「2度と教会には行かない」と言いましたが、口とは裏腹に私の信仰はますます確信を得ていきました。

互いにぎくしゃくした期間が過ぎた後、とうとうその日がやって来ました。父はいつにも増して強い口調で教会を取るか、家族を取るか決めると言いました。以前から私を家から出したがっていた義母も、このときとばかりに私を責めました。支部長さんや兄弟たちが両親の説得に来ていただきましたが結局は受け入れられませんでした。

いろいろ考えた末、私は教会を選びました。天父へと続く細い、しかし確かな道を自分自身で選んだのです。家を出る日の朝、私は荷物をまとめながら祈りました。心には平安がありました。少しばかりの荷物をかかえ、理解を示してくださった友人宅に約2カ月間お世話になった私は、高校卒業とともにアパートに移り住みました。お金も家具もストーブすらもない冬の寒い部屋の中で、毛布にくるまって過ごしました。それでも私にとっては楽しい日々でした。

それから数カ月後、5月に入って支部長さんから「聖餐会で母の日に少しお話をしてください」と言われ、私は軽い気持ちで

その責任を引き受けました。すでに母への憎悪は心の内になく、あるのは彼女への愛と思慕の思いでした。日曜日、母についてお話をした私は涙が止まりませんでした。母を心から許せた一瞬でもありました。

次の日、あるお店で食事をしているとふいに「後ろを見なさい」という声が聞こえました。不思議な気持ちで振り向くと、そこには階段があり、ひとりの女性が昇ってくるのが目に入りました。それは昔別れたきりの、どこにいるのかすらわからなかった母でした。5年振りのまったく偶然しか言いようのない再会でした。母は私が家から出されたこと、教会に入ったことなどいろいろな事情をある人から聞いて知っており、私を引き取りたいと申し出てくれました。私はやはり少し迷ったので支部長さんに相談したところ、「教会に行ってもよいという約束を取ってから決めた方がいい」とアドバイスを受けました。

母は「教会に行ってもよい、頑張りなさい」と逆に励ましてくれました。友人たちとのつらい別れもありましたが、私は18年間生まれ育った北海道を後にし、埼玉の新

しい家族のもとへと旅立ったのでした。

あれからもう5年の月日が流れました。今私は宣教師として働く特権を与えられています。伝道に出る日の朝、母は何も言わずに封筒を渡してくれました。中にはお金が入っており、私は耐えきれずに泣きました。新しい義父も母と共に私の伝道に対して理解を示してくれ、物質面、精神面で援助を与えてくれます。

あの苦しかったとき、私は何度も絶望しました。でも成長した私が今ここにいます。私の心は主に対する感謝の気持ちで一杯です。また多くの兄弟姉妹に感謝しています。

確かにこの教会が唯一真の教会であり、キンボール大管長の勧告に従うならば、私たちは必ず神のみもとに帰ることができることを証します。これから多くの試練があるでしょうが、そのようなとき、「わが子よ汝この事を知れ、すなわちこれ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためのものなり」(教義と聖約122:7)という聖句が私の心の支えとなることでしょう。(むらかみ・そのみ 1962年生まれ、東京ステーキ部ひばりヶ丘ワード部出身)



## 永遠のサイクルー伝道 —姉妹共に専任宣教師に 召された喜び—

横浜ステーキ部小杉支部  
山下 典子

**私**の専任宣教師としての経験も、もう8年も前のことになりました。

1年半の私の伝道を、当時、家族は本当によく助けてくれました。父は毎週のように便りをくれましたし、母も、やれお芋だ、洋服だと、ダンボールに一杯詰めて送ってくれました。四季折々の食べ物、真新しいセーターやスカートなど、必要と思われる物を1年半の間に何度も送ってくれました。家族の反対を押し切って伝道に出て1年半、あるいは2年もの間、1通の便りも手にできない日本人宣教師の多い中で、それはまれに見る非会員家族からの援助でした。

両親にとって私の伝道は決して喜ばしいことではなく、むしろ悲嘆にくれる絶望的

な出来事であったはずなのに……。それでも娘の決意と行動を尊重し、信頼して精一杯のことをしてくれる両親の深い愛に、何度涙したことでしょう。

そんな家族の中であって、妹・文子の助けも大きな支えでした。まめな便りとともに、伝道の後半には、金銭的にも彼女に頼っていたと言っても過言ではないように思っています。「申し訳ない、すまない」と頭を下げながら、彼女のこの助けに、また両親の助けに対して、いつの日かきっと神様からの祝福があるようにと願わずにはいられませんでした。

ちょうどその頃、不思議な思いが私の内に頭をもたげるようになりました。それは、

「私の家族はきっと改宗する。その中で文子が最初に改宗するに違いない。そして伝道に召されるはずだ」という思いです。この思いは、私の懸念とは裏腹になぜか不思議に穏やかで、心の内を温かくさせ、次第に広がっていきました。私はさっそく宮崎支部の宣教師と連絡を取り、妹を訪問して下さるようお願いしました。当時、両親は支部からはるか離れた所に住んでいて、訪問は不可能のように思われました。そのような状況の中でも宣教師は訪問して下さいましたがいまだ機熟さず、改宗には至りませんでした。

それから待つこと8年、私が改宗して11年目になります。様々な働きかけのあと、伝道中に親しくなった吉原姉妹が専任宣教師として福岡伝道部に召され宮崎に転任となり、私の妹を教えることになったのです。どんなにこの時を待ったことでしょうか。

「神様のことは信じてるし教会にも行ってみたいけど、姉さんみたいに伝道に出て親を悲しませたくないから、まだ決心がつかないの」と言っていた妹が、宣教師の熱心な祈りと力添えによりバプテスマを受け、1年を待って伝道へと召されていきました。

「26、7歳にもなって改宗した妹が伝道に出ると信じていたのは、単なる私の願望にすぎなかったのだ」と、自分に言いきかせていた私でした。しかしそのような心配は無用とばかりに、妹は改宗間際から「伝道はすばらしい。私も伝道に出たい」と訴えるようになりました。私たち夫婦の間では「文子に、だれかふさわしい神権者を捜してあげたいね」と話し合っていたにもかかわらず、「彼女の意志を尊重しよう。彼女自身の人生なんだから」とみこころに任せ、文子共々焦がれる思いで待った1年間でした。

そして文子は、勇んで伝道に出て行きました。「兄さん、姉さん、伝道はすごいです。何も心配していません。まず神の国と神の義とを求めよ、です」という証でつづられた便りを読むたびに、神様は何と不思議なことをなさるのだらうと思います。主の思いは人の思いとは異なる、まさしくその通りだとしみじみ思います。ひとりの友によって福音を知った私。伝道で知り合った友。その友から福音を聞き、みずからも伝道に召された文子。次にどんな伝道が展開されるのでしょうか。

「僕は七十人としても召されているから、夫婦で伝道もできるんだよ」という夫の言

葉に力を得て、日頃やりたいやりの思っていた夫婦伝道を始めました。伝道リーダーの指示のもと、ステーキ部宣教師の方と共に日曜日のわずかな時間を使ってふたり手を取り合い、主に頼り、導きを求め、ときには路地に入って祈りを捧げ、讃美歌を口ずさみながら歩き回るひとときは、何にもまして喜ばしいひとときです。

子供たちもチョロチョロしながら「桃(長女、6歳)がパンフレット渡す」「今度は太郎くん(長男、4歳)の番だよ!」と、取り合いをしています。受け取ってもらえると「やったあ、きょうはもう3人に伝道したね」と喜び、素通りされると「あーあ、でも大丈夫だよ、あの人はまだ神様のこと知らないんだから。知ってたらきっと聞いてくれるよね」と力強い言葉。

「お父さん、伝道にはふたつあるんだね。文子お姉ちゃんみたいにひとりで遠い所に行くのと、桃たちみたいに家族と一緒にするのと。桃は家族でする方がいいなあ。だって楽しいもん。ねっ」という娘の声を聞きながら、幼いときから福音を分かち合う喜びや楽しさを知ってくれたらうれしいね、とほほ笑み合う私たちです。

1月4日、冷たい風の中、今年最初の夫婦伝道を試みました。たかが1時間歩いただけで手足はかじかみ、冷たくなった耳は切れそうに痛み、頭のしんがジーンとしびれるような感覚を覚えました。それも暖かいはずの日中に。そのとき改めて、宣教師の方々の深い愛と並ならぬご苦労が思い起こされ、感謝の涙を禁じ得ませんでした。

彼らは猛暑の沖縄で、豪雪の北陸で、吹雪の北海道で、来る日も来る日も1年半、2年もの間歩き続けているのです。だれに強いられるのでもなく、彼ら自身の意志と信仰によって、しかも喜びをもって、ただひたすら福音を説いて歩いているのです。どれほど感謝したらよいでしょうか。

ここに、妹文子からの便りを彼女自身の証としてご紹介したいと思います。

「兄さん、姉さん、伝道はすばらしいですね。今、私はこの時間さえあれば何もありません。朝目覚めるとき、『さあ、きょうはどんなすばらしい経験をするだろうか』と胸がワクワクします。……朝出かけるとき、また夜寝るとき、同僚と祈りながら幸せを感謝し、涙が出ます。タオルを持って、泣きながら祈ることもあります。『うれしいんだから笑いなさいよ』と、ふたり泣き笑いで言い合っています。この世の何のわず

らいごともなく、ただ求道者と家族と、自分の成長のためだけに感謝し祈れるなんて、これ以上の喜びはないです。

私は、14歳の少年であったジョセフ・スミスが1820年に神と御子イエス・キリストに会ったという出来事を話すために、ここ姫路にいます。

仕事を中断し、自分の貯金を使い、家族と別れて……。

ただ、ただジョセフ・スミスの経験を話すため、私はこの地にいます。そう思ったとき、紹介レッスンに対する力の入れ方が変わりました。それはそうですね。このために大きな犠牲を払って来ているんだと思えば自然に力が入ります。そしてみたまを感じます。レッスンが長引く人に最後に言えるのはこのことだけです。ほかに何を言っても同じです。ただこの事実を伝えるだけです。この15分間の紹介の中に含まれる奥義はすごいものがありますね。考えれば考えるほど、大きな力があります。それもそのはず、一少年が神に会ったことにより人の人生が変わるんですから。たった15分の話により、人生が変わるんですからね。一生懸命働きます。もっともっと多くの人にこのすばらしい出来事を知ってもらいたいです。

神様のことを熱心に真心からするのなら、かなえられないことなど何もないですね。働けば求道者が見つかります。その人を愛せば、その人からまたほかの人を紹介していただけます。そして、その人たちから私は清められ、謙遜にさせられ、証を強められていきます。『すべては善し』です。

主よありがとうございます、神様本当にありがとうございます!と、声を大にして叫び出したいくらい幸せです。」(やました・のりこ 1951年生まれ、小杉支部日曜学校教師)

### 《原稿を募集しています》

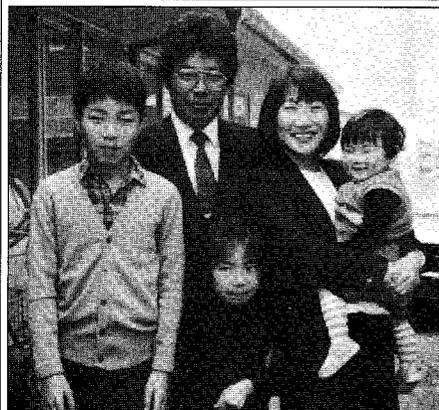
●心に残った記事の感想文(「読者のひろば」で紹介します)、各地の話題や行事、証、カットなどをお送りください。8月号掲載分の締切は6月7日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入してください。

●あて先:〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03-440-2351(代)

## 信仰があれば

—1日タバコ60本、酒1升の生活を改めさせた福音—

仙台ステーキ部長町ワード部  
山本 記和男



**私**と末日聖徒イエス・キリスト教会の出会いが9年前にさかのぼります。当時、私は北海道の釧路に住んでいました。私の周りには、創価学会、天理教の信者といった人たちがおり、何かことあるごとに声をかけられよく誘われました。しかし私はまだ子供が小さかったせい、宗教や信仰についてはまったく興味がなく、むしろきらいな方でした。

寒い冬のある日、ひとりの外人とひとりの日本人が訪れました。私にとって、それまで見たことのないほど彼らは澄んだ目をしていて、輝いて見えました。また、やさしい愛に満ちた人たちでした。それが末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師だったのです。

興味本位で話を聞いているうちにレッスンは進み、バプテスマを受ける一歩手前までいきましたが、そこで問題になったのが「知恵の言葉」です。私はタバコを1日60本は吸い、また酒も大好きで、いくら飲んでも足元がふらつくことさえないくらいでした。こんなことでは、バプテスマを受けられるわけがありません。

それから9年の歳月がたちました。仕事の都合で仙台に移り住んだある日、父が交通事故に遭い、重体で助からないかもしれないという母からの電話がありました。私の実家は帯広で、すぐに帰るといふわけにはいきません。ただオロオロするばかりです。そんなとき、釧路で会った宣教師たちを思い出しました。

私は、今自分にできることはただ神様に祈ることだけだと思い、家族には黙って朝夕ひとりで祈っていました。何日か過ぎたある日、母から父が良くなってきたという知らせが入り、私の心は大きな喜びで一杯になりました。

それから2、3日たった夕方、私は子供ふたりと何気なく散歩に行きました。それまで子供と散歩などしたことはないのです

が、その日に限って会社が終わるとすぐ帰り、子供を連れて歩いていました。すると、ふたり連れの女性に声をかけられたのです。ひと目見てすぐにモルモンの宣教師だとわかりました。こんな偶然がこの世にあるのかと自分でも驚き、神の存在をまざまざと思い知らされました。

私は、近くに来たら家の方に寄ってください、とふたりの姉妹宣教師に言い残し家へ帰りました。妻に今あったことを話しながら、私のような者でも神様は見捨てないでいてくださると大きな祝福に感謝し、喜びと希望で一杯でした。

それからというもの、自分で福音を勉強したいと思いましたが9年前と同じ問題が出てきました。相変わらず1日タバコ60本、酒1升、加えて会社のつき合いで夜遅くなるのが1週間のうち4日ほどあり、子供の顔も10日くらい見ないこともしょっちゅうでした。到底モルモンの教会員になれるような状態ではなく、妻などは「お父さんは絶対に知恵の言葉を守ることはできない」と言って、最初から信用していませんでした。私も、酒、タバコをやめなければならないという気持ちはあったのですが、なかなかやめられないでいたのです。そんなとき、レッスンをしてくれた谷崎姉妹が、信仰があれば、酒、タバコは苦勞せず必ずやめられます、と言ってくれました。そのときの谷崎姉妹の顔は、自信に満ちていました。

私はその言葉を信じて、いつやめられるかと思っているうちにレッスンは進み、バプテスマのときが来てしまいました。もうここまで来たら、なるようにしかならないと思い、バプテスマを受けました。

するとどうでしょう。今まで30日もタバコを吸わずにいれなかったのが、まったく吸いたくはないではありませんか。谷崎姉妹の言うておられた「信仰があれば」というのは本当だったのです。妻などは、どうせ

2、3日もしたらまた吸い始めるだろうと言っていたのですが、以前とまったく違う自分を見て、子供と共に改宗する気になり、1カ月ほどあとにバプテスマを受けました。

私は、妻と子供ふたりを身をもって改宗に導いた喜びと、自分の手によってバプテスマを施すことができたうれしさで、心から神様に感謝せずにはいられません。

現在は家族そろって教会に集い、家の中では笑い声が絶えない、本当に幸せな毎日です。これまで私たちを導いてくださった宣教師の谷崎姉妹、丸山姉妹に感謝しています。

まだまだ長くて遠い道のりですが、家族全員で頑張って努力していきたいと思えます。(やまもと・きわお 1948年生まれ、長町ワード部長老定員会第二副会長)

## 心の底から わきあがる喜び



仙台ステーキ部長町ワード部  
西原 千秋

**4**月のある日、友達から電話がかかってきました。「実は、1カ月前から宣教師にレッスンを受けているの。ひとりで聞くのはもったいないから、あなたも来ない？」彼女はそう言って、その日に予定していたレッスンを私を誘いました。そのときとても胸騒ぎがしました。不活発ではありましたが、私は長い間ある教会の会員でしたので、ほかの教会の宣教師からお話を聞くのは大変抵抗があったのです。でもそのとき、「行きます。喜んで」と彼女に返事をしてしまいました。

実は5年前に、私は姉妹宣教師の訪問を受けていたのです。しかしその頃の私はほかの教会の活発な会員でしたので、まるで聞く耳を持っていませんでした。けれど、彼女たちが伝道期間を終了して帰るときに、

「イエス様は今も生きていらっしゃる。そして、ジョセフ・スミスは確かに神様とイエス様にお会いになりました」と目を輝かせながら言い残していった言葉は、その後もずっと、私の脳裏に焼きついていたような気がします。

私はその日、ふたりのアメリカ人宣教師、チャペル長老とレイ長老に会いました。彼らはジョセフ・スミスについての話をしました。私の胸は、なぜかつかしきで一杯になりました。「その方を知っています」と私は答えていました。しかし、数回のレッスンの後で友達は「もう来るのをやめてもらうことにしない？」と言いました。彼らはすばらしい人たちだけれど、お話はどうも信じられない、これ以上彼らに期待させては悪いからというので、私もそれに同意しました。

しかし、彼らはあきらめずに、その後私の家に来て、もう少し話を聞いてほしいと言いました。彼らの熱意は大変なもので、それではもう1度だけと思い、レッスンを受けることにしました。

レッスンの後でひとりの長老が「イエス様はあなたを心から愛しています。私にはそれがよくわかります」と繰り返し言いました。

イエス様の愛を確信を持って語る彼らを目の前にして、私は15年間も教会に所属していたにもかかわらず、彼らの10分の1ほどの信仰もなかったことに気づいて、本当に赤面するほど恥ずかしい思いがしました。こんなすばらしい青年のいる教会とは、いったいどんな教会なのかしら、とも思いました。

彼らが帰ったあとで、私はとても平気な気持ちになり、祈らずにはいられなくなりました。そして「天のお父様」と言った途端に涙があふれて、言葉が声にならず、ただ声をあげて泣き出してしまいました。そのときです。私は確かにみたまのささやきを聞きました。「長い間重かっただろう。もういい、私の所で休みなさい」と。

神様は、すべてをご存じだったのです。この数年間、私は所属していた教会のことですべて悩んでいました。教会にも行けず、祈ることもできずにいたのに、やめることができなかったのです。15年間も歩いてきた道は、とてもひとりでは引き返すことができなくなっていました。そんなときに、神様はふたりの宣教師を遣わしてくださったのです。

その日から私は、モルモン経を読み始めました。1週間で読み終わり、教義と聖約や彼らが紹介して下さった数々の教会出版物を、短期間のうちに読むことができました。強いみたまの導きをいつも感じていました。しかし、聖典を理解することは大変むずかしく、私は宣教師に「もっとよく理解してからでなくては、決心がつかせん」と言いました。そのとき彼らは、アルマ書32章21節を示し、「信仰とは、完全に物事を知ることはありません。よく祈って、信じて、希望を持って決めてください」と言いました。

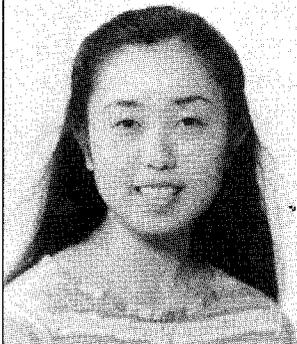
彼らと出会って2カ月半後の1984年7月8日、私は33歳でバプテスマを受けました。福音は私に自由を与えてくれました。心の底からわきあがる喜びと、感謝と祈りの日々を与えてくれました。

教会員になって間もなく、私は初等協会の副会長の責任をいただきました。私には大きすぎる責任でしたが、一生懸命努力す

るとき、神様は必ず助けてくださることを知っています。そして今、私は子供たちを通して、あふれるばかりの祝福を受けています。

同じ年の12月には、娘が8歳のバプテスマを受けることができました。何と心強いことでしょう。そして私の最大の願いは、夫と息子と共に手を取り合って、同じ道を歩むことです。ふたりに先がけて主の群れに入った私たちには、その責任があると思います。そのためにも、もっともっと成長しなくてはならないことをいつも感じています。

今、多くの愛する兄弟姉妹と共に、このすばらしい福音を分かち合える幸福を心から感謝しています。そして、かつての私のように、真実の福音と真実の教会を求めている多くの人々が、1日も早く宣教師と出会うことができますように、心から願っています。(にしはら・ちあき 1950年生まれ、長町ワード部初等協会第二副会長)



## 「これほど強いみたまの存在を感じたのはこの教会が初めてでした」

町田ステーク部町田第1ワード部  
山田 英里香

**去**年の12月23日、念願のバプテスマと接手礼を受けることができました。日記を見て初めて気づいたのですが、宣教師からバプテスマのチャレンジを受けたのがちょうど1年前の12月24日でした。9月に21回目の誕生日を迎えながらも、両親の許可が下りるまで待った、短いようで長い1年でした。その1年の間、様々な出来事がありましたが、「聖徒の道」の改宗の証は私にとって特に支えとなりました。

私が初めて末日聖徒イエス・キリスト教会のことを知ったのは、3年ほど前です。当時私はイギリスにおり、友人の家に下宿していました。その家の父親が、たまたまカリフォルニアに旅行をしたときに入手した当教会の「回復された真理」の本を私に見せてくれたのです。彼は、私がキリスト教に大変興味を持っていることを知っていたので、私のためにその本を持って帰って

きてくれたのでした。

私は幼い頃からいろいろな「不思議」な体験をしていたことから、その白い本に書かれてあったジョセフ・スミスの体験も、当たり前のように受け入れました。つまり、書かれてあったすべてのことを信じたのです。しかしその頃の私は、地元の別の教会の会員でもあったので、そのときはそれだけで終わってしまいました。

大学に通うために日本に帰国してからは、通算8年の間に覚えたクイーンズ・イングリッシュを忘れないよう、英国語を用い、イギリスの讃美歌を歌う教会を捜していました。しかしやっと思いつけた教会も、1カ月に1度しか行くことができず、それも1時間もかかる場所にありました。

祖父母の家での下宿生活から、アパートでひとり暮らしをするようになって間もなく、11月の寒い夜に、アイヴィー長老とオ

# 私の理想の宗教、教会、 山田英里香さん



「私の理想の宗教、教会」の巻頭として、シンガポール、高橋をバプテスマ

## 交差点

「交差点」は、1985年10月6日付の「全東京新聞」に掲載された山田英里香さんの記事である。この記事は、山田さんがバプテスマを受けたこと、そしてその後の信仰生活について語っている。記事は、山田さんがバプテスマを受けたこと、そしてその後の信仰生活について語っている。記事は、山田さんがバプテスマを受けたこと、そしてその後の信仰生活について語っている。

涙があふれ、泣きっぱなしでした。

私はバプテスマを断念しました。私は神様を愛していました。この教会も信じていました。でも、愛する両親をこんなにも悲しませることは、私にはできなかったのです。

それ以来私は、バプテスマは受けられなくても、できるだけ教会員らしくなるようにしました。扶助協会や日曜学校、聖餐会に集い、しばらくしてから什分の一も納めるようになりました。同じ頃、伝道に出る決心もし、そのために貯金も始めました。不本意ながらも、反対する両親に隠れて系図も調べました。

そしてこの教会を知れば知るほど、自分が小さな頃から無意識のうちに描いていた理想の教会にぴったりであることがわかってきました。白い教会、白い衣を着て水に沈められるバプテスマ、接手札、聖なる神殿、予言者、純潔の律法、どこのワード部、支部でも同じ教を説いていること、教会員全員が堂々と証ができること、キリストの模範を忠実に守ろうとしていること……。数えあげればきりがありません。

会員になれば、すばらしい祝福が待っているでしょう。その一方で前よりも一層激しくサタンが襲いかかってくることも感じていました。しかし、私はこの道を選びました。どうしてもこの教会が真実で、神様の教会であることを否定できなかったからです。どんなに厳しい試練に遭おうと、最後まで神様の与えてくださる、細く、ときには透明になってしまいそうな糸にしがみついて、決して放したくはありません。

早く両親の許可が下りてバプテスマを受けられるようにと、毎日曜日、断食をしていました。その答えが11月末にありました。両親が承諾し、12月にバプテスマを受けられることになったのです。それまでに何度か両親とバプテスマのことを話すたびに、なぜか泣いてばかりいた私を見てきたせいでしょか。こんなに早く受けられるとは思っていませんでした。

ひとつの大きな山を越えることができたが、私自身の霊性に問題が残っていました。霊的に十分な高まりが得られなかったのです。このバプテスマも延期した方が良かったらうかとも考えました。しかし、もしこの機会を逃してしまつたら、いつまた受けられるかわかりません。私は思い切って受けることにしました。苦しい時期ではあっても、神様が優しくほほえんで「私

ウマー長老が訪ねて来たのです。あまり接触をしたことのない教派だったために警戒しました。しかしキリスト教にはいつも興味を持っていましたので、「あなたたちの教会に深入りするつもりはないし、会員になるつもりもない」と断わって、宣教師の話聞くことにしました。

レッスンを何回か進めてから、「この教派には何かがある」と気づくようになりました。そのひとつには、それまでやや低迷気味だった私の第6感が、宣教師の訪問とともにまた戻ってきたからです。また、私はよく質問をする求道者で、レッスンを始める前に必ず質問をしていました。ところが、7回ほど行なったレッスンのうちのほとんどの質問の内容が、それから行なうレッスンに関連するものでした。私は、神様がこの末日聖徒の教会に関して何か言おうとしていらっしやるのでは、と思うようになりました。

そのため、知恵の言葉も、そのレッスンを受ける前から守り始めました。たまたま知人に末日聖徒がいたので、それだけは知っていたのです。

祈りについてのレッスンを受けてから、この教会が真実であるかどうか祈るように宣教師に勧められました。言われるままに祈るうちに、これまでの数年間ほかの教会に通っていたにもかかわらず、心からの祈りを捧げていなかったことに気がつきました。

本当にお祈りをし始めた初めの1週間は、何とも言えない気味の悪い気配がし、怖く

なるくらいでした。宣教師に話してみますと、「それはサタンが祈るのをやめさせようとして企んだことだから、とにかく祈りだけに専念するように」と言われました。そのアドバイスを受けたあと、神様を信頼して祈りに集中できるようになると、そのいやな気配もなくなりました。

そして12月24日のレッスンで、バプテスマのチャレンジを受けました。1時間半にもおぶこのレッスンの間中、私は寒くもないのに体が震えてたまりませんでした。どうにも自分で止めようがないのです。時間がたつにつれ、話す言葉のコントロールができなくなってしまうほどでした。しかしあとで聞いてみると、宣教師の方は変な気分になるどころか、すばらしい気持ちで一杯だったそうです。この震えが今まで何であったのかわからなかったのですが、昨年の「聖徒の道」12月号の木村姉妹の証を読んで、初めてわかりました。これは、私の霊の体を感じていたのです。

そして、1月15日、私の成人式の日がバプテスマ予定日となりました。ところがその3日前に、いまだ外国の地にいる父から国際電話が入り、バプテスマをやめるように言ってきたのです。それまで反対をする人々から様々なことを言われても、人々が神を信じようとしなないのを悲しく思うだけでしたが、父から言われたときはショックでした。ほとんど泣いたことのない母も、私の入信を知って以来泣き通しだそうです。人の前で泣いたことのない私も、このときばかりは1時間の電話の間中、とめどなく

は待っているのですよ」と言っておられるように思いました。

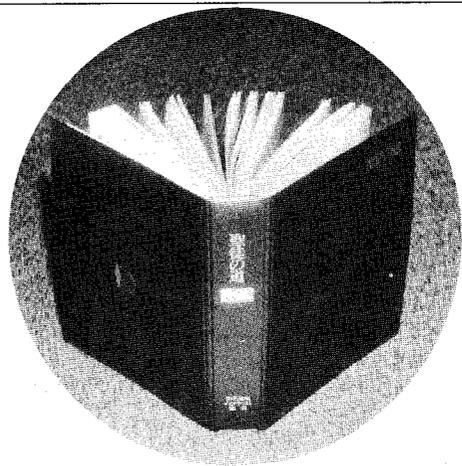
12月23日、多くの兄弟姉妹、そして私の教会外の3人のお友達に囲まれて、バプテスマを受けました。それまでに私を助けてくださった皆さん、特に私と共に喜びと悲しみを分かち合ったストスイッチ姉妹とユードル姉妹に本当に感謝いたします。

バプテスマは、昇栄のための門にすぎません。真の戦いは、これから始まるのです。神様は、教会員、そして教会外のすべての人々を愛されています。これらすべての人々に神様の祝福がありますよう、お祈りいたします。(やまだ・えりか 1963年生まれ)

## 「聖徒の道」専用ファイル

新発売(黒地に金文字,1冊400円)  
一本棚にすっきり立って  
収まります—

- 1年分(12冊)をとじ込めます。●機関誌本体をいためずにスピーディーな着脱が可能です。●保存・整理に最適です。
- お申し込みは通常の教会書籍と同じように図書主任を通じてご注文ください。



## 印象に残った大会号のファウスト長老のお話「神のみ業」

「聖徒の道」を読み始めて11年余りになりますが、私にとって「聖徒の道」は、霊の泉となっています。夫はまだ改宗していませんので、私は夫の気持ちも考えて、教会に毎週は行っておりません。しかしながら、「聖徒の道」を通してたくさんの証を得、悩みや迷いから抜け出し、根気よく主人の改宗するのを待つようになりました。

特に総大会報告は霊の糧となって蓄えられます。指導者のメッセージを読むとき、私は活字を読んでいるという意識はなくなり、大会の会場で指導者の声を直接聞いているような目に満たされます。

今年の1月号もそんな思いで読ませていただきましたが、特に印象づけられたのは、ジェームズ・E・ファウスト長老の「神のみ業」というメッセージでした。

この中でファウスト長老は、身体障害者としてこの世に生を受けたことについて、救い主の言葉を引用され、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」(ヨハネ9:3)とされました。そして神のみ業は、障害者の両親、家族、友人、関係者の愛ある世話やいたわりの中に大いに現われていると述べられ、いくつかの例を紹介されました。

私もこのメッセージを読みながら、ある

友人のことに思いを馳せておりました。その方には、ふたりのお子さんがあります。上の娘さんは正常ですが、下の息子さんは重度の障害児です。そのため、ご家族はたくさんのお試練を受けました。

昨年6月、彼女は過労から肺炎を起こして入院しました。その間、娘さんが障害者の弟の世話を一手に引き受けることになりました。娘さんは高校3年生ですので大学受験の準備をしておりました。弟の送り迎えのため、学校も早退や遅刻をし、家に帰ってから弟の世話に明け暮れ、弟の毎日の生活記録もきちんと書きました。

ある日、娘さんが母親である彼女を見舞いに病院に行ったとき、彼女が「障害者の弟を持ったばかりにあんたも苦労するね」と言うと、娘さんは「お母さん、そんなこと言ったら弟がかわいそうだよ。弟の面倒は私がちゃんと見るから、お母さんは何も心配しないで」と言ったそうです。友人は何とばかりなことを言ってしまったのだろうと反省し、娘さんの弟を思うやさしさに胸が一杯になって、涙が出て仕方がなかったと、見舞いに行った私に涙ながらに話してくれました。私も感激して涙しました。

ファウスト長老のメッセージを読み終え、また友人の話の思い出し、神様はすべての人を愛してください、障害者を通して、家族の愛や絆を一層強めてくださるという証を得ることができました。(松村玲子 東京東ステーク部水戸ワード部)

## 私の作品をカラーで紹介できないのが残念です

私は「聖徒の道」の100冊読破に励んでいる超愛読家のひとりです。「聖徒の道」に載っている美しい写真や絵も、

伝道に活用できるように切りぬいて集めています。大学生として、また個人としてキリスト教美術を勉強していますが、最近1カ月かけて一作品ができあがりましてのご紹介します。

影絵やステンドグラスは、キリスト教美術に最もふさわしい技法と言えます。作品それ自体に美しさは見られませんが、後ろから光を照らした瞬間、この世を超えた幻想の世界が写し出されるのです。そこには「神聖な美しさ、真理、象徴、哀愁、憧憬、あたたかさ」があります。

私は大スクリーンである大空を見あげ、西日の太陽の光を浴びるたびに、大芸術家である神の壮麗なみ業に心を打たれ、神の強烈な愛と幸福を全身全霊で感じ取ることができそうです。

私たちの内にキリストの光が射すとき、そしてさらに聖霊の光(力)を受けるとき、私たちは神の栄光を輝かすことができるのです。(小野寺秀夫 和光大学人文学部芸術学科を本年卒業、町田第2ワード部独身成人プログラム長老定員会代表)



小野寺兄弟の作品「私が天使になって」(アルマ29・1)

# 献堂された浜松ワード部教会堂

(静岡ステーク部)

浜松市入野字西彦尾前490

TEL 0534-48-3734

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。」(伝道3:1)

今をさかのぼること17年、1968年も押し迫った11月25日、東海道本線浜松駅にふたりの宣教師が降り立ち、楽器やオートバイ産業の盛んな、この静岡県西部地域へも回復された福音は直べ伝えられ始めました。

最初は宣教師の住居を拠点に、医師会館や公民館などで伝道集会を重ねました。1970年9月27日には浜松支部が設立され、この地域での最初の改宗者であった大村昌由兄弟(現静岡ステーク部幹部書記)が初代支部長として召されました。

その後、借家を転々とした浜松支部も、ついに1979年7月26日、多くの教会員の経済的な犠牲によって待望の教会堂が完成しました。

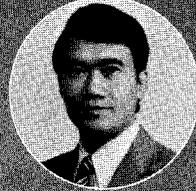
教会堂完成後は教会員も急速に増え、1981年4月21日に静岡ステーク部設立に伴い浜松ワード部となり、去る1985年2月10日に完成後6年目にして、献堂式を挙行することができました。

献堂式は、相良健一地区代表ご夫妻、ロバート・D・グッドウィン伝道部長ご夫妻をお迎えして執り行なわれ、瀬野忠愛静岡ステーク部長が献堂の祈りを捧げられました。

みたまのあふれるすばらしい献堂式となり、参加した一人一人は感謝の気持ちで胸が満たされ、この聖なる場所に主の忌む、あらゆることを持ち込まないようにする気持ちを強くすることができました。

現在浜松ワード部の聖餐会には120名前後の教会員や求道者が出席するまでに成長しましたが、17年の歩みを振り返り、いつも主が指導者を通して私たちを導き励ましてくださいましたことを心から感謝したいと思います。また福音を宣べ伝えてくださった宣教師や、多くの兄弟姉妹の働きにも感謝いたします。

今後、この浜松地域を中心としたシオンのステーク部が1日も早く建てられることを望みつつ主のみ業に励みたいと思います。(浜松ワード部監督・細井隆)



細井 隆監督

敷地面積	1,003.75
建築面積	244.90
延床面積	679.39

